

エミル・クロニクル・ ダイアリー

結明

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつてアクロニアは、大規模な人々の「消失」に襲われた。

それは、必然だったのか、偶然だったのか、この世界を生きる人々には、どうあつても解明することはできなかつた。

絶望に打ちひしがれる者、悲しみに暮れて、自らの主を探しき迷い続ける者、どうあろうとも強く、今を生き続ける者、どうあろうとも世界を守り、今を生きる人々を守護する存在。

これは、彼女たちの、我々が知らない、もしかしたら続いていくかもしれない【歴史】

ダイアリー

目次

家具と本と『あの子』と少女 — 1

【さよなら】『ただいま』 — 6

家具と本と『あの子』と少女

今も昔も変わらぬ様に語り継がれるものがありましよう。

古今東西、様々な言い伝えや枕物語、はたまた手のひらに収まってしまおうような短いお小言のような物、形は違えど多くの人々が知っている、そのような物を絵に起こし童子でも分かりやすくざっくりばらんに、そして面白おかしく描いたのが「紙芝居」なるものでございます。

昔々、遠の昔、それはそれは気の遠くなるような時代のお話でございますが、実際に合ったことでございます。

その昔、この地には人々の「想い」なるものを実際に触れる形として産み出す方法が確かに存在していたのです。

これはその時代を生きた人たち、その人達の一部が一齐に「消失」してしまつた後のお話でございます。

確かに存在していた人々が、消えてしまふ事の悲しき、残された人々の「想い」その一部を私は見たのです。

悲しきことですが、必ずしも絶望に暮れて涙を流すだけではなかつた人も居るので

す。

少女が飛空艇の紐を降ろしている。

ただただ無表情で、なんの事はない、何時もやっているルーチンワークという物であろう。

その紐を伝い、かつてはアップタウンと呼ばれ、人のひしめき合っていた、今は閑散として、開いている店も、店番をするゴーレムもおらず、ただただ、上層街という認識のための名前を付けられ、交流もほとんど無く風化して朽ちていくだけの悲しい虚像であった。

飛空艇を呼び出すための紐を片付け、起動キーを忘れ形見でもあるコウモリのポーチに仕舞い、錆付き開きっぱなしになってしまった門を潜る。

雨による水垢や土埃、様々な汚れが積み重なった架道橋は、橋が落ちないようにとしっかりと磨かれているが、それ以外の場所は目も当てられぬ惨状だ。

少女はその壁面や床面を全く気にすることもなく、地下への階段を降りていく。

かつて、ダウンタウンと呼ばれたその場所は、下層街と呼ばれ、上層街と同じように風化している場所はあるものの、人々が行き交い、会話し、そして生きている。

少女は増改築を繰り返され、複雑な迷路のようになった通路の一区画をなんの迷いも

なく進み、再び飛空艇の起動キーを取り出すと鍵穴のような場所に差し込んだ。

軽い電子音とともに鍵の開く音が響き、少女が軽くドアノブを捻りながらドアを押すとすんなりとドアは開いた。

「ただいま」

短い一言とともに、少女は自らの『家』に足を踏み入れ、再び鍵をかけなおす。

「おかえりなさい、お掃除とかして待つてたよ」

幼い少女特有の、柔らかく、そしてハリのある声で返事が帰ってきた。

少女——明かしてしまえば名前はグロリアだがこの物語に於いて彼女自身の名前はさして重要なファクターではない——が声のする方を向けば、透き通るような白い肌、全てを映して美しく輝く瞳、肌と瞳の色に合わせたかのように一本一本が絹糸と見間違えるほどに美しい白髪、そして司書のような服装と、手に持った大きな本が特徴的な……。

——アルマ・モンスター、行き交う人々を見つめ、強い感情の発露や想いの力の結晶化等を通じて発現する、『モンスターの人間化』——

彼女はブーフ・アルマ、少女のかけがえのないパートナーであり、尚且つ親代わりでもあり、真正正銘の、「消失」した親の忘れ形見でもある、というなんとも複雑な関係の同居人であった。

「なにか、見つかった？ できればあの人の置いていったものとか……庭から持つてこれないものとか、ね」

少女は悲しそうに目を伏せて、首を横に振る。

「そっか、そうだね、もう持つてこれるものは全部持つてきちゃったもんね」

ブーフ・アルマ、ブーフは部屋全体を軽く見回して、懐かしむように言葉を零す。

その姿を見て少女は、何も言うこと無くブーフを抱きしめ、椅子に腰を下ろして自分の膝の上に載せるのである。

毎日の恒例行事となったその行為は、何も言わずともお互いの傷と、そしてお互いを愛し、想い、そして信頼する心を共有する行動として毎日のように繰り返されていた。

少女がブーフの顔を覗き込むように見つめ、ブーフもそれに応えるかのように少女の顔を見つめ返す。

そうしたゆったりとした時の中で、少しだけ、写真の中の彼女が笑ったような気がした。

お互い、何も言わずとも、同じような気持ちになったのだろう、二人揃ってダンスの上においてある写真立てを見つめながら、どちらからとも無く小さく笑みをこぼして、そうやって彼女たちの一日は終わるのだ。

パートナーが、親が、「消失」する、そんな経験をしながらも、たしかにこの世界を強

く、強く生き続ける、その姿からは絶望など感じられず、毎日朝、昼、夜、欠かさず一度づつタンスの上の写真立てに手を合わせて祈るその少女たちは、今を生きている。

【さよなら】『ただいま』

Now Loading…

……

……

……

—— E m i l

—— C h r o n i c l e

「……この恋心は本物なんです、作られた、そうあるべきだから持った恋心じゃなく、本当に、好きなんです」

「たとえば、何度忘れられたって……何度でも……思い出させて……差し上げます、と約束しましてよ？」

a f t e r

o f

a n o t h e r

エミル世界の中心、アクロポリスのアップタウンにひしめき合っていた人々は急激にその数を減らしていた。

もちろん、行き交う人々の家が壊れただけの、ソラから巨大なクジラが降ってきて昼飯の代わりに街を食ったというわけではなく、普段町中に置かれていたゴレムや、周りに商品を広げて看板を出したまま眠ったり近くの友人と談笑したりしていた少年少女達が、居ないのだ。

いや、居ない、と言う言い方は少々違うかもしれない。

彼らは何時も、どこかに居なくなってしまう事があった、姿を消す、ハイディングやクローキングを使ったかのように、ふっと姿がなくなつて、そこにいた事さえなくなつてしまうような消え方をする事があったのだ。

それが、数日前に唐突に、一斉に起きた。当然、彼らが常に連れていた、おそらくは冒険のパートナーである人々（およそ人とは呼べないような機械や動物を連れている者も多かったが）は、取り残されるのだ。

普段は別れを惜しみつつも、しょうが無い、という雰囲気ですり出していたのだが、彼

らが一斉に居なくなる数日ほど前からは、その様子が違っていたのだ。

まるで、ここで送り出してしまつたら、今生の別れになるかのような、そんな雰囲気であつたり、どこか、いつもの姿を真似た空元気かのような……。

そんな人々の生活、嘗て共に在つた者たちが、目の前に在るカタチとして存在しなくなつた人々の行動、一部分、それも極々限られた例でしか無いが、それをここに、記していこうと思う。

例えば、そう、あの黒く長い癖つ毛の、丈が短い赤色の着物を着た少女。

彼女は――

「分かつてます、分かつてましたよ、私なんかに止められるわけが無いって」

清姫は、何時も自分を側に置いてくれた主人が、目の前で居なくなつてしまつた事に、深い悲しみを覚えていた。

彼女の行動原理は主人が自分を好んでいるかどうか、主人に嫌われないかが第一であり、その他の理由は二番三番、主人が、惚れた相手の事こそだけが気がかりで、それを元にして行動をしていたのだ。

ソレほどまでに自分の主人を慕っていた彼女が、避けられぬ運命と知つていても、どうしても行つて欲しくなかつたのだ。

嘗て彼女は、これと同じような悲しみを味わった事があった。

愛する者に騙され、裏切られ、愛する者を焼き殺し、自らの命さえ断ってしまったそんな物語から彼女は救われた。

物語のレールを飛び出し、その時を生きていた。

そして自らの愛する者の側に居ることがどれほど幸せかを知ってしまった。

「分かつてますよ、分かつてます……私達が忘れなければ、憶えていれば、あなたの記録は残り続ける」

「分かつていますけど、それでも、それだけじゃ」

「……寂しいですよ……お尻も、痛いです……冷たいです……」

何時もは硬い地面に座っているのがしんどくなつて、主人に甘え、主人がそつと小さなクッションを敷いてその上に清姫を座らせていた、南稼働橋と呼ばれるアツプタウンの入り口に一人座った清姫は、何時も側に在った暖かく、そして何より大切に思っていた者の座っていた一つ隣の床に座ると、膝を抱えて涙を流し始めた。

涙がこぼれ落ちないように必死で唇を噛んでいた清姫に一つの影が落ちる。

「こんな所で、何をしていますの、清姫」

多分に心配するような、しかし少し呆れたような声色で話しかけたその少女は、葡萄酒のように深い紅色をした髪をツインテールにし、コウモリの翼を思わせるようなマン

ト、夜空のように暗く、美しい黒色をしたワンピースを着ていた。

名はアルカードと言った。

「アルカ……どうしてここに……」

慌てて涙を拭い、アルカードを見上げる清姫は、どこか現実感を感じていないぼんやりした顔でその姿を見つめ続ける。

「どうして、って、自分の友人が一人で地面に座り込んで泣きじやくつていたら心配して声をかけるのは当たり前でしょう？」

「まあ、理由は大体想像はつきますけれど、ね」

少し落ち込んだような、困ったような表情をしながら、アルカードは清姫の悲しみを『分かる』、と言い、清姫も、その言葉からアルカードにも、自分と同じような事態が降り掛かったのだらう、となんとなく、雰囲気で察した。察したが故、何も答えられなかった。なぜ、そんなに毅然としているのか、なぜいつもの調子でいられるのか、不思議でたまらなかったのだ。

清姫には、アルカードが何も感じていない、等とは思っていない、友人として永く付き合ってきたからこそ、彼女の性格をよく知っているからこそ、なぜそんなに平然としていられるかがわからなかった。

どれほど強い精神を持っている彼女でも、大事にしていた主人を失えば、多少なりと

も動揺し、取り乱しているかと思つていたのだ。

「私は約束しましたもの、例え何度忘れたつて必ず思い出させる、と」

震える声で、泣きそうになりながら、笑顔を無理やり作り、それでも信じたものを手放さぬように毅然とした態度で、清姫に語りかける。

嘗て、彼女が約束した言葉、その言葉を、何度でも繰り返し、何度でも思い出し、絶対に忘れられない、永久に消えることのない絆が彼女を前に進ませるのだ。

その言葉と無理矢理に笑うアルカードの姿に清姫は立ち上がると、アルカードの手を取り、涙が溢れ続けるのを手で拭いながら、同じように笑顔を作つた。

「そうよねアルカ、私達は何度だつて思い出させてあげなきゃ、私達が暗いままだとあの人も困っちゃうものね」

二人の少女が手を取り合い、今度は二人揃つて歩いて行く。二人で揃つて、門をくぐり、階段を登り、中央の噴水で待っているのだ。

彼女たち二人が、彼女たちの、友人同士だった主人二人が、離れてしまったその場所で、二人揃つて待ち続けるのだ。

「ただいま」
きつと、今も生きています。